

## 戦争を次世代へ伝えて

福岡県 久留米市立田主丸中学校 3年  
行徳 美那（ぎょうとく みな）

「死に損ない。」

今年五月、修学旅行生を案内していた被爆者の方に中学生が発した言葉です。なぜこのような心ない言葉が出てくるのだろうか、不思議でなりませんでした。

私には、曾祖父がいます。曾祖父は戦争に行き、大きな怪我をしながらも、命だけは助かり日本に帰ってくる事ができています。私は戦争について多くの知識を得ることが、戦争を経験された方々を自分の中で受け止める糸口になると思い、曾祖父から話を聞くことにしました。

曾祖父は、大正七年生まれの九十六歳です。日中戦争中、昭和十四年の七月に召集令状、通称赤紙によって太刀洗にあった陸軍の航空情報隊に入隊しました。結婚して二年、長男である私の祖父が生まれる年でした。それから終戦までの六年間もの間、戦地にいたというので私はとても驚きました。曾祖父は、中国、ベトナム、マレーシア、そしてビルマ（現ミャンマー）へ渡りました。航空情報隊は、敵の飛行機を見つけては電報を打って知らせていたそうです。次々と飛んでくる飛行機に日々忙しく、また撃ち落とされないだろうかと不安を抱えていたのです。ある時、ビルマの飛行場にいた曾祖父は、近くに落とされた爆弾の爆風によって飛んできたもので、頭と手に深い傷を負いました。その爆風は人の体をも、持ち上げるほど強いものだったそうです。その傷跡は、いまだに曾祖父の顔や手の甲に痛々しく残っています。しかし、恐ろしく、悲しい話だけでなく、アジアの国々で見た色鮮やかなバナナやパイナップル畑、ウミガメの産卵の様子を見物した話をしてくれました。そんな些細な事が曾祖父にとっては大きな力であり、支えとなっていたのでしょう。曾祖父は、当時の気持ちをあまり話しません。戦争の苦しさや恐ろしさは並大抵のものではなかったのだと、時折顔をしかめる曾祖父の姿から伝わってきました。また、現地の方々と話していた曾祖父は、壁に描かれていた浦島太郎に似た絵がとても印象に残っているといいます。浦島太郎はビルマの亀に乗ったのかな、そんなことを思いながら遠い日本のことをよく思い出していたそうです。私は、“早く戦争が終わってほしい”“日本に帰りたい”と願っていたのではないかと思います。

昭和二十一年、終戦の翌年の五月に日本に帰国した曾祖父には、大きな戸惑いがありました。それは、近所の青年が十数人も戦死していたからでした。集落を眺めながら、どんな顔をして帰ろうと、道端で一人考えたそうです。案の定、集

落の人々は冷たい態度で曾祖父を迎えました。

「おかげで帰ってこられました。」

そう一言言って家に帰ったあとも、あまり話さずに過ごしたそうです。戦争は、地域の温かいつながりや家族の絆さえも奪ってしまうものなのだと言った胸が張り裂けそうになりました。

私は最後に、「死に損ない」という暴言を吐いた問題について、どう思うのか聞いてみようと思っていました。ですが、聞かないことにしました。それは、話を聞いていて、ここまで戦争の恐ろしさの中を一生懸命戦い抜いてきて、苦しみ続けた曾祖父は、「死に損ない」なんかじゃない、素晴らしい人だと強く確信したからです。その経験をした人、命を落とした人、そんな方々のおかげで今の日本の平和があるのだと思いました。そして私は、代わりに曾祖父に聞きました。

「じいちゃん、何か伝えたいことない。」

と。曾祖父は、

「戦争せんことたい。」

と言いました。その言葉の重みは、命の重みにも感じられました。

私は、曾祖父の話聞くことができ、本当に良かったと、心から思います。戦争が終わり、七十年を迎えようとする今日、戦争を経験された方は少なくなりました。戦争を知らない私たちの世代は、他人事として捉えていたり、間違った考えをもっている人が多くいます。そんな中、身近にいる曾祖父から話を聞くことで、私の平和と戦争に対する気持ちが強くなり、戦争の愚かさを次世代に伝えていく一人になることができましたと思います。もし私たちに伝えてくれる人がいなければ、戦争は繰り返されていたかもしれません。あなたはそれでも、後世に伝えようとしている方々に「死に損ない」と言いますか。語り継ぐということは、平和な世界を創り、守っていくための大きな一歩なのです。

忘れられつつある平和の大切さや命の尊さを深く考え、理解し、受け止めていくことが今の私たちにとって必要なことなのだと思われました。

“戦争せんことたい” 曾祖父の言葉は私の胸を強く打ちました。